

## 温泉好き

前所長 鈴木 庸夫

### 1. はじめに

私事で恐縮だが、温泉好きである。もともと子供の頃から温泉が好きだったが、特に日帰り温泉旅行の楽しみを覚えてからそれに拍車がかかった。初めて日帰り温泉に行ったのは、今から30年ぐらい前の独身時代に役所の同期と蓼科へテニス旅行に行ったとき、運動後の汗を流すために蓼科の温泉旅館のお風呂に入れてもらった時のことだ。確か入浴料は1,000円くらいだったと思うが、非常に気持ちが良いこんな温泉の利用法があるのかと思った。今ではかなり高級なホテル・旅館でも日帰り入浴ができるところが増えてきており、そのためのガイドブックが売られているが、当時はホテル・旅館での日帰り入浴はそれほど一般的ではなかった。それで目星を付けたホテルや旅館にいちいち電話をかけて、入浴だけさせてもらうことはできますか、と訊いては出かけたものである。もちろん日帰りだけではなく、家族で宿泊旅行をするときには、なるべく温泉に泊まるように行程を考えている。

### 2. 日本人の温泉好き

ところで、日本人の温泉好きは筋金入りで、古くは古事記や日本書紀あるいは各地で編まれた風土記にも登場するという。ちなみに、このうち「日本三古湯」と呼ばれているのが、「伊予の湯」（道後温泉）、「牟婁の湯」（白浜温泉）、「有間の湯」（有馬温泉）だということのようである（（一社）日本温泉協会のHPによる。）。

また、いささか古いデータではあるが、「gooリサーチ（現NTTコムリサーチ）」が平成25年2月28日に発表した「国内旅行と情報メディア」に関する調査（60代以下のgooリサーチ登録メンバー150人に対するインターネットアンケート調査）によると、旅行の目的として「温泉」を挙げている人は35.1%と2位のグルメ（B級グルメ以外）の20.1%を大きく引き離してダントツの1位である。また、（公社）日本観光振興協会の「第34回観光の実態と思考調査」（平成28年3月発行）によると、10代～20代の旅行目的（主な目的）の第1位は「温泉を楽しむ」（19.2%）となっており、温泉は中高年だけでなく若者にも人気がある事が分かる。

### 3. 温泉ランキング（立教大学名誉教授前田勇先生の分析を中心に）

そんなことを考えているうちに、果たして日本の温泉で一番人気があるのはどこなのだろう、結構ゲームもあることだし温泉ランキングの変遷はどうなっているのだろう、と気になってきた。そこで、本稿ではそのような温泉ランキングについて考えてみたいと思う。

「温泉ランキング」で検索すると色々な旅行会社等が行っている調査結果がたくさん出てくる。中には北海道、東北、関東といった地域別ランキングを掲出しているサイトも多いが、私としては、全国ランキングを調べてみたいと思い、観光経済新聞社が毎年発表されている「にっぽんの温泉 100 選・総合ランキング」によることとした。このランキングは、2015 年度で 29 回を数えるもので、(一社) 日本旅行業協会・(一社) 全国旅行業協会加盟の旅行者、運輸機関、観光関連機関等に専用投票ハガキを配布し (2015 年度は有効回収ハガキ 9,541 枚)、温泉と旅館ホテルを 5 つずつ選んで理由 (温泉の場合は、①雰囲気②地域内の充実③泉質④郷土の食文化の 4 つから選ぶ) とともに記入する、それを集計したものを観光 8 団体 ((一社) 日本旅館協会、全国旅館ホテル生活衛生同業組合連合会、(一社) 日本温泉協会、(一社) 全国旅行業協会、(一社) 日本旅行業協会、(公社) 日本観光振興協会、(独法) 日本政府観光局及び (公財) 日本交通公社) による審査委員会に諮って認定する、という厳格なプロセスで選定されている。

そこで、観光経済新聞社のサイトから過去のランキングを調べようとしたところ、既に同様の先行研究がなされており、同サイトに掲載されていることを見つけた。それは、立教大学名誉教授の前田勇先生による「「にっぽんの温泉 100 選」を通してみた人気温泉地の分析」である。前田先生は、まずこの「100 選」の第 1 回である 1987 年度から第 19 回の 2005 年度までを 5 年間ごとに 4 つの期間に分け (第 19 回のみなので第 4 期のみは 4 年間)、各年度の順位をそのまま得点とし (ランキング 1 位は 1 点、・・・10 位は 10 点、というようにして 30 位以下は一律 40 点とする。)、合計点の少ないものほど上位となるランキングを作成するとともに、各温泉地を A : 大規模施設中心型、B : 大規模～小規模施設複合型、C : 中規模施設型、D : 小規模施設型の 4 つの累計に分類し、それぞれの時代における人気温泉地の推移、時代背景などを分析されている。表 1 に前田先生作成のランキング表を示す。

表 1 各時期の「にっぽんの温泉 100 選・総合ランキング」(立教大学名誉教授前田勇先生作成)

第 1 期(1987～91)			第 2 期(1992～96)			第 3 期(1997～2001)			第 4 期(2002～05)		
順位	温泉名(地域)	類型	順位	温泉名(地域)	類型	順位	温泉名(地域)	類型	順位	温泉名(地域)	類型
1	和倉(石川)	B	1	和倉(石川)	B	1	登別(北海道)	A	1	草津(群馬)	B
2	雲仙(長崎)	B	2	秋保(宮城)	A	2	和倉(石川)	B	2	登別(北海道)	A
3	指宿(鹿児島)	B	3	山代(石川)	B	3	秋保(宮城)	A	3	由布院(大分)	D
4	登別(北海道)	A	4	登別(北海道)	A	4	道後(愛媛)	B	4	黒川(熊本)	D
5	別府(大分)	B	5	雲仙(長崎)	B	5	雲仙(長崎)	B	5	下呂(岐阜)	B
6	温海(山形)	A	6	指宿(鹿児島)	B	6	指宿(鹿児島)	B	6	指宿(鹿児島)	B
7	玉造(島根)	B	7	鬼怒川(栃木)	A	7	草津(群馬)	B	7	和倉(石川)	B
8	山代(石川)	B	8	上ノ山(山形)	B	8	山代(石川)	B	8	道後(愛媛)	B
9	道後(愛媛)	B	9	道後(愛媛)	B	9	由布院(大分)	D	9	城崎(兵庫)	C
10	三朝(鳥取)	C	10	下呂(岐阜)	B	10	鬼怒川(栃木)	A	10	雲仙(長崎)	B
						10	湯の川(北海道)	B			

なお、前田先生の分析においては、1992年度の第6回から2001年度の第15回まで連続で1位となり、2002年度以降は「名誉入選扱い」となった古牧温泉（2004年に経営破綻、星野リゾートにより再建。）は除外されている。

この表からは次のようなことが見て取れる。

- ① 第1期は、まさにバブル経済のただ中の時期であり高級志向が強かった時期である。ランキングを見ても、第1位の和倉温泉は言わずと知れた「プロが選ぶ日本のホテル・旅館100選」（旅行新聞新社）で36年連続第1位を誇る宿を有する温泉地であり、その他の温泉地も、施設、おもてなし等に優れた高価格、高品質な宿が多くある温泉地がランクインしている。
- ② 第2期は、バブル崩壊期であり、世の中の風潮も綱紀粛正の色合いが濃くなってきた時期である。第1位の和倉温泉は変わらないが、第2位に秋保温泉（仙台都市圏）、第7位に鬼怒川川治温泉（首都圏）、第10位に下呂温泉（中京圏）と都市に比較的近い大規模施設のある温泉地がベスト10入りしている。景気の縮小とともに近場志向が現れているようだ。なお、雲仙温泉が順位を下げているのは1991年6月の大火砕流の発生が影響しているかもしれない。
- ③ 第3期は、景気の悪化が益々進み、金融機関の破綻も相次いだ時期となる。温泉ランキング的には大きな変動はないが、登別温泉が第1位になり、草津温泉が第7位にランクインするなど、温泉そのものの魅力がランキングに寄与している。また、初めて由布院温泉も第9位とベスト10入りした。
- ④ 第4期は、4年間であるが、これまでと変化が見られる。景気は未だ低迷が続き、低価格志向が進んだ時期であるが、この頃から後、第1位を草津温泉が占めることになる。また、湯布院温泉（第3位）や黒川温泉（第4位）など決して大規模ではないが個性的で露天風呂に力を入れた宿が多く、かつ、街ぐるみで工夫を凝らした温泉地が上位に入っている。また、外湯巡りで温泉情緒たっぷりな城崎温泉もベスト10入りしている。逆に高価格・高品質を代表する和倉温泉が第7位と順位を落とした。

前田先生の分析はとりあえず2005年度の第19回の方までとなっている（なお、先生は、本年5月22日に、環境省主催の「全国温泉地サミット」において観光経済新聞社による「100選」のデータを元に人気温泉地の推移等の分析を交えて基調講演をされたようだが、残念ながら資料は未入手。）ため、さらにこの続きを同じ手法で分析してみたい（表2）。

表2 2006年度以降のにつぼんの温泉100選・総合ランキング

第5期(2006~10)					第6期(2011~15)						
順位	温泉名(地域)	類型	順位	温泉名(地域)	類型	順位	温泉名(地域)	類型	順位	温泉名(地域)	類型
1	草津(群馬)	B	6	別府八湯(大分)	B	1	草津(群馬)	B	5	黒川(熊本)	D
2	登別(北海道)	A	7	道後(愛媛)	B	2	由布院(大分)	D	7	有馬(兵庫)	B
3	由布院(大分)	D	8	有馬(兵庫)	B	3	登別(北海道)	A	7	指宿(鹿児島)	B
4	黒川(熊本)	D	9	下呂(岐阜)	B	4	下呂(岐阜)	B	9	道後(愛媛)	B
5	指宿(鹿児島)	B	10	和倉(石川)	B	5	別府八湯(大分)	B	10	城崎(兵庫)	C

⑤ 第5期は、経済回復が道半ばにあった2008年にリーマンショックに襲われ、世界的に景気が落ち込み、日本も大変厳しい状況に陥った時期に当たる。ランキングを見ると1位から4位までは第4期と変わらず、別府八湯と有馬がベスト10入りして、城崎、雲仙が落ちたが、大きくは順位の変更はない（ちなみに、城崎は第11位、雲仙は第13位）。

第4期から引き続き、草津、登別さらに別府八湯を加えて市や町全体がいかにも温泉という雰囲気を醸し出している温泉地や、由布院、黒川といった街ぐるみで工夫をこらした温泉地というところがランクインしている。なお、雲仙と別府八湯が入れ替わったが、第4期以降九州の温泉地がベスト10に4ヶ所もランクインしている。

⑥ 第6期は、東日本大震災から始まり、復興、アベノミクスの進展の中で少しずつ経済の回復に向けて歩んでいる時期である。特に2014年、2015年と外国人の訪日客が飛躍的に伸びたことが特筆できる。ベスト10を見ると城崎と和倉の入れ替えはあったものの、ランキングを構成する温泉地はほとんど変わらず、定番化してきていることが伺える。今後外国人の動向がどのように反映されるか注目される。

#### 4. その他のランキング

ここまでは、観光経済新聞社のランキングを立教大学名誉教授前田勇先生の分析を中心に見てきたが、もう少し別のランキングについても見てみたい。

##### ① じゃらん人気温泉地ランキング（株式会社リクルートライフスタイル）

このランキングは2015年度で10回目となるが、「じゃらんネット会員」又は「じゃらんネット」予約者について2015年度は8月18日から8月26日までの9日間の対象者について集計したものであり、3の観光経済新聞社のランキングとは異なり、いわば素人（一般消費者）の意見を代弁するものである（有効回答数12,062人）。

このランキングの面白いところは、色々なセグメント別のランキングが見られるところである。例えば、これまでに行ったことがある温泉地のうち「もう一度行ってみたい」温泉地、まだ行ったことはないが「一度行ってみたい」温泉地、最近1年間に行ったことのある温泉地の内「満足した」温泉地等々様々なランキングがあり、さらに男女別、居住地別、年代別等様々なセグメントのデータがある。例えば「もう一度行ってみたい」温泉地を例にとると、表3のようになる。

全体的には、3の観光経済新聞社のランキングを構成している温泉地と似たような傾向があるが、男女とも箱根に「もう一度行ってみたい」人が多い。

表3 「もう一度行ってみたい」温泉地ランキング

	全体(n=12,062)	うち男性(n=6,370)	うち女性(n=5,692)
1位	箱根	草津	箱根
2位	草津	箱根	由布院
3位	由布院	由布院	草津
4位	別府温泉郷	登別	別府温泉郷
5位	登別	別府温泉郷	登別

表4 居住地別の「もう一度行ってみたい」温泉地ランキング

居住地	北海道 (n=878)	東北 (n=758)	関東・甲信越 (n=4,687)	東海 (n=1,327)	北陸・関西 (n=2,131)	中国・四国 (n=917)	九州 (n=1,364)
1位	登別	秋保	箱根	下呂	城崎	別府	由布院
2位	洞爺湖	乳頭・水沢・ 田沢湖高原	草津	奥飛騨	有馬	由布院	黒川
3位	湯の川	花巻	由布院	箱根	由布院	道後	別府
4位	定山溪	鳴子	熱海	草津	別府	有馬	霧島
5位	阿寒湖	湯の川	乳頭・水沢・ 田沢湖高原	登別	白浜	黒川	指宿

また、居住地別の「もう一度行ってみたい」温泉地ランキングも興味深い（表4）。

ご覧の通り、基本的に居住地の近くの温泉地の人気が高く各地域毎にどのような温泉地が好まれているかが伺えるが、由布院や乳頭・水沢・田沢湖高原、登別は、他地域の居住者からも人気が高い。特に、由布院を始めとする九州各地の温泉地には、西日本各地で訪れたいという人が多く、3の観光経済新聞によるランキングとも整合している。

なお、表には示していないが、年代別に20代から60代まで10歳刻みで見たランキングでは、いずれの年代でも第1位は箱根となっており、2位以下は20代の第5位に熱海が、30代の第5位に黒川がそれぞれ入っているのを除けば、第2位から第5位はいずれの年代も草津、由布院、別府、登別の4温泉地で占められており、根強い人気を感じさせる。

## ② 2015年年間人気温泉地ランキング（楽天トラベル）

次は少し趣向を変えて、楽天トラベルの2014年11月1日から2015年10月31日までの1年間の宿泊実績をもとに集計された実際に商品として売れた人気温泉地ランキングをご紹介します（表5）。もちろん、この他にも色々な旅行会社がランキングを発表されているが、年間で全国を対象に

表5 実際に商品として売れた人気温泉地ランキング

1位	熱海
2位	別府
3位	草津
4位	那須
5位	鬼怒川
6位	白浜
7位	伊東
8位	秋保
9位	道後
10位	下呂

したものは①のじゃらんのものとの楽天トラベルのものしか見つけられなかったので、特定の会社のランキングとなることをお許しいただきたい。

これを見ると、これまで見てきた比較的客観的なランキングや「もう一度行ってみたい」ランキングと、実際に商品として売りたいいわゆる売れ筋ランキングとでは、かなり違った傾向が見られる。

商品として売れるというのは、単純にその温泉地の魅力だけで測ることはできず、大消費地からの時間距離というものが大きく影響すると思われる。首都圏からの時間距離で見ると、第1位の熱海、第4位的那須、第5位の鬼怒川、第7位の伊東は、近場で、大きなホテル・旅館があり、手軽に行ける温泉地というイメージで今も大きな需要があると思われる。また、近畿圏では白浜が、中京圏では下呂がそれに該当すると思われる。

ただ、その中であって、別府、草津、道後というのは、やはり全国的なビッグネームであり、全国各地から人を集めていると思われる。

### ③ 2015年外国人に人気の温泉ランキング（楽天トラベル）

次に、最近増加が著しい訪日外国人に人気の温泉地ランキングを見てみたい。

これもまた楽天トラベルの資料によるが、2015年1月1日から2015年12月31日までの間に楽天トラベルの外国語サイトで予約された宿泊者数（人泊数）が多い温泉地のランキングは表6の通りである。2015年7月15日付東洋経済オンラインの記事を元に考察する。

やはりと言うべきか、富士山と温泉が同時に楽しめる河口湖が第1位となっている。また、河口湖には中国系資本のホテルも多く中国からの訪日客に特に人気がある。第7位の強羅と第8位の仙石原を合わせて「箱根」とするとこちらも順位をさらに上げそうだが、やはり富士山の近くの温泉リゾートということではないかと思われ、また、ゴールドルート上に存在する。第2位の由布院と第6位の別府という九州の2大温泉地はいずれも特に韓国からの訪日客に人気が高い。また、第4位の登別や第5位の洞爺湖は外国人一般に人気の北海道の中でも札幌、千歳からのアクセスが良い。洞爺湖についてはサミット以後海外にも知られるようになり、無料Wi-Fiの整備など外国人の誘客に努めている。欧州人に人気の飛騨高山も第3位にランクインしている。第9位の有馬や第10位の城崎は大阪や京都からも近く、独特の温泉情緒が人気のようである。

表6 外国語サイトで予約された宿泊者数(人泊数)が多い温泉地ランキング

1位	河口湖
2位	由布院
3位	飛騨高山
4位	登別
5位	洞爺湖
6位	別府
7位	強羅
8位	仙石原
9位	有馬
10位	城崎

このように必ずしもゴールデンルートではなくても温泉を生かして集客力のある地域もあり、今後も益々訪日外国人をターゲットとした各地の集客努力が期待される場所である。

## 5. 最後に

ここまで色々な温泉ランキングをベースに人気温泉地について紹介してきたが、最後に私自身が実際に行ったことがあり、もう一度行ってみたいと考えている温泉地を紹介したい。

まずは乳頭温泉郷（秋田県）である。ここはそれぞれ趣の異なる源泉を持った7つの湯（宿）から構成され、最も有名な温泉は「鶴の湯」である。「鶴の湯」は白濁したお湯であるが、露天風呂の底からお湯が沸き出していて山の秘湯の雰囲気も申し分ない。ただし有名になりすぎて宿が取りにくいので、私は近くの国民休暇村に泊まって日帰り入浴したのみだが、このときは2泊して八幡平の方も含めて10以上の温泉に入浴した。今でも心残りなのは、そのとき折角玉川温泉に寄ったのに当時はよく知らなくて入浴しなかったことである（ご存じの方も多いと思うが、玉川温泉は日本一の強酸性泉で高い放射能を有するラジウム泉である。）。

次に宝川温泉（群馬県）である。ここは一昔前の温泉ブームの時に非常に人気が高く、よくドラマの舞台としても出てきた温泉地で、最近では訪日外国人にも人気が高いようである。利根川の上流沿いに大露天風呂がいくつもあり、特に紅葉の時期には大人気である。川沿いの開放感と爽快感は何とも言えない。

海の温泉では、和歌山県の2湯（白浜温泉の「崎の湯」と勝浦温泉の「忘帰洞」）が好きだ。「崎の湯」は白浜温泉を代表する温泉でまさに現在に続く「傘妻の湯」である。波打ち際近くにあるため高波の際には入浴禁止になる。白浜方面に行ったときには必ず立ち寄る。「忘帰洞」は勝浦温泉のホテル内にある温泉だが、こちらは波打ち際近くの洞窟風呂で、昔紀州の殿様がそのあまりのスケール感と豪快さにしばし帰るのを忘れて入浴していたといういわれのある温泉である。いずれも関東からはやや行きにくい、関西では人気の温泉である。

城崎温泉（兵庫県）の温泉情緒も独特の魅力がある。宿で借りた浴衣を着て、タオル（手ぬぐい）を入れた竹かごを持って外湯巡りをする。外湯巡りというと渋温泉（野猿の入浴で有名な地獄谷温泉のすぐ近く）や野沢温泉（いずれも長野県）も有名ではあるが、私はやはり城崎の川沿いをそぞろ歩きするのがいい。

最近はいくつかのホテル・旅館が入湯手形のようなものを出し、それを持っていると好きな宿のいくつかの温泉に入れるというシステムを取り入れているところも多いが、その走りかどは定かではないが、かなり初期から取り入れていたのが黒川温泉（熊本県）である（今年が手形導入30周年になるらしい）。黒川温泉の各宿は温泉施設に特に工夫を凝らしている宿が多く、このようなシステムを導入しやすかったのだと思うが、趣のある露天風呂あり、洞窟風呂ありと楽しめる。熊本復興のためにもぜひまた行ってみたいと思う。

この他にも「もう一度行ってみたい」温泉地やまた行ったことはないが「行ってみたい」温泉地は数々あり書き出すときりがないのでこの辺で筆を置くこととするが、温泉を活用した観光、地域振興というのはまだまだ色々なやり方があると思う。日本では深く掘ればどこにでも温泉が出ると言われるくらい温泉は日本人に身近な存在だが、外国人にも日本の温泉は人気が高い。例えば、本年4月15日

に発表された「訪日外国人の訪日時行動調査(台湾、香港、シンガポール)」(オリコム・楽天リサーチ)によると、「訪問時に日本で行ったこと」では、台湾、香港ではいずれもショッピング、麺類(ラーメンうどん)を食べる、に次いで第3位に温泉入浴が入っている。また、シンガポールについても第6位と上位を占めている。さらに、「予定していなかったが日本で行ったこと」では3カ国ともディズニーランドや日本文化体験などを押さえて第1位となっている。

この調査では訪日前の日本に関する情報源として、テレビ番組やガイドブックを挙げる人も多いものの、ホームページやSNSを情報源とする人達はそれらを上回っている。

温泉というのは日本人のメンタリティーにマッチした観光資源だと思うが、外国人にとっても大変興味深い観光資源であると思われる。温泉を一つの要素とし、観光を起爆剤に地域振興を進めようとする地域の方々は、その効用、開放感、自然との一体感といった魅力をICTの活用等様々なチャンネルを通じて世界に向けて発信し、折角の資源を大いに活用していただきたいものである。